

## 沖縄マンガ史・試論 ——沖縄マンガの黎明期——

大 城 亘 武

### 要 旨

本稿は、1832年から1945年までの沖縄マンガをレビューしたものである。沖縄マンガの淵源を葛飾北斎の「琉球八景」に求めた。ついで明治初期の琉球帰属問題を題材とした諷刺画の検討を行なった。八重山蔵元絵師・宮良安宣の画稿、さらに、沖縄で最初の商業新聞である『琉球新報』に掲載のマンガを調べた。明治34年および35年に諷刺画が掲載されていたことが見出された。また、琉球（沖縄）生まれの下川凹天の業績について検討した。下川凹天は、沖縄ではなく東京で漫画家として大活躍をしていた。明治45年に『琉球朝日新聞』に4コママンガが連載されていたことが明らかにされた。戦時中の1945年に、米戦闘宣伝部は宣伝新聞『琉球週報』にマンガを掲載していた。

### はじめに

本研究の目的は、沖縄マンガ史の構成を目指した試論である。沖縄マンガ史については、断片的な論考はいくつかなされているが、通史的な研究は始まったばかりである（大城、2010a、2010b）。大城（2000）は、沖縄マンガの始まりを大正期の下川凹天に指定していたが、文献的にはもっと遡れそうである。もっとも、これは沖縄マンガをどう位置付けるかによる。大城（2000）は、マンガではなく「コミック」の表記のもとにコミック概念について「コミック的なものをコミックと呼ぼう」（p.182）と、思いきった定義を与え、沖縄コミックについて次のように述べている。

沖縄の作家による、沖縄をテーマにした、沖縄で発表され、沖縄で流通している「コミック」と定義していいのだろうか。（同）

ここでは、①沖縄の作家である、②沖縄を題材にしている、③沖縄のメディアに掲載されている、の条件のいずれか一つを満たしておれば、沖縄コミック、すなわち沖縄マンガである、と定義しておこう。

### 1 沖縄マンガの黎明：中島蕉園（葛飾北斎）

中国皇帝によって琉球王国に遣わされた冊封使・周煌の復命書である『琉球国志略』（1757刊行）に、琉球の景勝地を描いた「球陽八景図」が添付されている。『琉球国志略』の日本版が1831年に徳川幕府から刊行されている（浦添市美術館（編）2010参照）。浮世絵師の葛飾北斎に琉球の景勝地を描いた「琉球八景」がある。浦添市美術館（2010）は「1800年代には、江

戸上りに伴って非常に多くの琉球関連物が出版されました。北斎が描いた「琉球八景」もその中の一つで、1832年の江戸上りにあわせて制作されたと言われています」（p.1）と記している。

おそらく幕府版『琉球国志略』の「球陽八景図」にインスパイアされて「琉球八景」が描かれたもの、と推測される。単なる摸写ではなくパロディー的創作が加わっている。「球陽八景図」中の2作には富士山を連想させる形状の山の遠景が描かれている。北斎は「球陽八景図」に触発され、原画中に、日本人馴染みの富士山を描き加えたものと考えられる。「中島蕉園」（図1参照）の原画には描かれていないが、「琉球八景」では北斎は富士山と思しき山と孤舟を描きこんでいる。北斎が琉球を訪れた史実は確認されていない。琉球を描く8作品中3作品において、琉球ではありえない富士山が後景に配されているのが興味深い。また、原画には描かれない舟や人物も追加されている。短歌における本歌取りである。北斎は「球陽八景図」のパロディとして「琉球八景」を創作したものと解釈できる。琉球の景観は中国を経て日本に伝わり、北斎の想像力を掻き立てたのである。

また、北斎は源為朝に材を採った滝沢馬琴の『椿説弓張月』の挿絵を描いており、北斎にストーリーマンガの萌芽を見ることが出来る。

### 2 明治日本で描かれた琉球・沖縄

明治初期、琉球王国の帰属をめぐる、清国と日本の間には国際的な葛藤があった。この問題を中心に日本の諷刺パロディ雑誌は、多くの諷刺画を掲載してい

た。琉球・沖縄問題を題材とした作品群である。

## 2.1 龍宮の争い（明治10年3月）

文献的に確認できる、沖縄が諷刺画として描かれた最初の作品は、図2に示す「龍宮の争い」（『團團珍聞』明治10年3月14日）であろう。作者は、署名や落款がないので判然としないが、おそらく本多 錦吉郎（ほんだ きんきちろう、嘉永3年12月2日（1851年1月3日）－大正10年（1921年）5月26日）であろう。本作は『團團珍聞』の創刊号に掲載された。諷刺画は「狂画」と呼ばれた。あるいは、於東京絵（おどけえ）と呼ばれた。『團團珍聞』は、於東京絵を標榜している。創刊者の野村文夫（1836年－1891年）は、脱藩密航留学経験があり、西洋の事情に通じていた。一時内務省のお役人をしてしたが辞職、在野にあって政府批判の急先鋒となった。

琉球王国は、日中両属の国際関係から、清国と日本国の間に領土問題があった。すなわち、両国とも琉球の領有を主張していた。「龍宮の争い」は、「りゅうきゅうの争い」である。龍宮ではないが、龍宮を想起せしめる効果がある。図の中心に琉球を表象する子供を置く。子供の頭部は「球」である。球は玉であり珠である。珠は掌中の珠であり、とても大切な子供である。さらに、琉は龍である。龍の子を目的に清国と日本国の親権争いの様である。

左右の龍は、右が辮髪で中国装であることから清国、左は日本髪、和服であることから日本だと知れる。詞書きの最初は、清国、続いて日本国、図中底辺部には琉球の主張が記されている。琉球の主張は「どっちでもいいが、身体が一つでしかたがないよ」となっている。詞書きを著述したのは、梅亭金鷲であろう。戯作者である。

『團團珍聞』は、その後も「琉球処分」を巡る問題に関心を持ち続けた。『團團珍聞』の姉妹誌『驥尾団子』も琉球帰属問題をテーマとした諷刺画を掲載している。

## 2.2 親方が凱旋する（明治12年1月）

明治11年末、琉球使節が密書を持って、外交条約を締結していた仏、米、蘭に接触を図るという「事件」が起こった。日本国の琉球併合に危機感を抱いた結果であった。仏、蘭は拒否し、米国は本国に問合せると

いうスタンスであった。図3は、この事件を諷刺する。琉球の清国への親和性を強調している。してやっつかりの琉球、慌てふためく日本、傍観する米国。

この事件は、政府を激昂させた。琉球使節は東京退去処分にされた。民権派であったはずの『朝野新聞』は、領土問題については国粹主義であった。高橋基一記者の激的な批判文を掲載した。

甚だしいかな琉奴の我が日本帝国を蔑視するや甚だしいかな琉奴の支那国に傾慕するや我が厚遇を忘れ我が寵眷に背き斯くの如き無礼不敬の文章を作為し之を外人に捧げ猶頤然として我が東京に駐在す（明治12年2月10日、旧漢字は新漢字に書き換えた）

「琉奴」などと悪態をついている。

## 2.3 判を剣に＝藩を県に（明治12年4月）

明治12年は、沖縄が日本に併合された年である。この事件は格好の諷刺テーマであり『我楽多珍報』（明治12年創刊）は、辛辣な諷刺画を掲載した。図4は、琉球における廃藩置県を諷刺する（明治12年4月12日）。明治5年に明治政府は、一方的に琉球国王を「琉球藩王」に陞した。この時点で琉球王国は消滅し、琉球王国は琉球藩にされた。当然琉球側が肯んじるはずがない。しかし日本国は松田道之を遣わし、また、警察と軍隊でもって王宮首里城を占拠してしまう。いわゆる琉球処分である。画中剣を振りかぶる人物が処分官松田道之である。洋装であるのに草履をはいている。ちぐはぐさは松田への、ひいては日本国への嘲笑いである。塵を箒で掃いているのが木梨精一郎である。県令心得を拝命している。判＝藩を剣＝県にしようとする暴挙を諷刺している。判には「龍宮」と刻まれており、琉球藩である。あくまで藩であって琉球王国ではない。詞書きで、日本政府が琉球側の対応に苛立っている様が記述されている。久保田米遷（1852年－1906年）の筆になる。

『我楽多珍報』はこの他にも、琉球処分帰属問題の諷刺画を掲載している。

## 2.4 紙細工製造所（明治12年8月）

図5は、『稔猫珍報』に掲載された諷刺画である。本誌は諷刺画を「戯絵」と表記している。諷刺画の作者は不明である。



図1 中島蕉園(葛飾北斎『琉球八景』のうち)浦添市美術館蔵



図5 紙細工製造所の図(『文妙戯化鯰猫珍報』第4号、明治12年8月19日)



図2 龍宮の争い(『團圓珍聞』明治10年3月14日)



図6 蜻蛉が芋を盗るの図(『人間萬事興し餘誌』第4号、明治10年3月14日)



図3 親方が凱旋する(『妙妙雑組』明治12年1月17日号)



図7 むずかる子をあやす図(『驥尾園子』第50号、明治12年10月8日)



図4 龍宮判処される(『我楽多珍報』明治12年4月11日号)



図8 和漢の争い(『文明餘音同楽相談』第5号、明治13年4月11日号)



図9 車の音(『轉愚叢談』第13号、明治13年12月13日)



図10 琉球芋の蒸返しの図(『能弄戯珍誌』第17号、明治14年9月20日)



図11 豚芋畑を荒さんとする図(『生久楽心誌』第5号、明治14年9月23日)



図12 男女の図(『八重山蔵元絵師画稿集』より)石垣市立八重山博物館蔵

毛高氏画稿全集



図13 男女の図(『八重山蔵元絵師画稿集』より)石垣市立八重山博物館蔵



図14 丑年を寿ぐ(『琉球新報』明治34年1月1日)

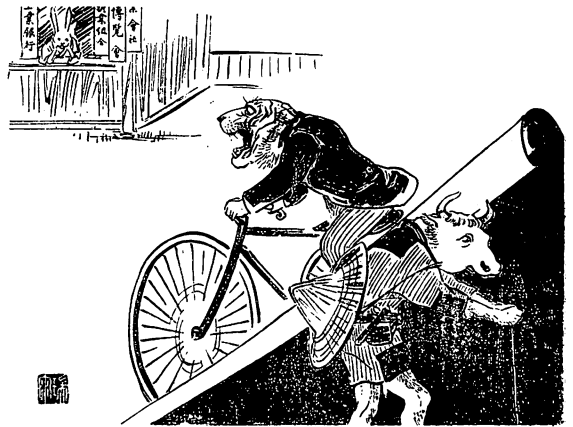


図15 虎登場す(『琉球新報』明治35年1月1日)



図16 広告マンガ(『琉球新報』明治35年7月28日)



図17 神出鬼没マゴジものがたり(『東京毎夕新聞』大正11年3月)



図18 厄介な駄々児(『東京毎夕新聞』大正元年11月4日)

明治12年4月1日は琉球王国が日本に併合された日である。5月には県令・鍋島直彬が赴任した。詞書きに「大和屋の新店」とあるのは、琉球国が日本国の版図に入ったことを意味する。図中右の2人は琉球人である。髪に2本の簪を挿している。小さく描かれた清国人に対して低姿勢の態である。しかし、これは清国に対する日本の優位を印象付けるものである。清国の軍事力に対して、紙細工ほどの位置づけしかしていない。

### 2.5 蜻蛉が芋を盗るの図 (明治12年9月)

図6は、琉球処分を諷刺している。画家は不明である。蜻蛉は日本を表す。豚は清国を表す。芋畑は琉球王国を表す。明治政府は琉球王国を処分し、自国の版図にしてしまった。琉球にとっては琉球王国だが、日本にとっては琉球藩である。国際法上、日本に実効



図19 女は国宝(『沖縄朝日新聞』大正15年2月10日)



図20 南瓜大尉と大耳兵卒(『琉球週報』第1号 1945年4月29日)

支配されているとはいえ琉球の地位は曖昧のままのようである。

### 2.6 むずかる小児 (明治12年10月)

『團團珍聞』の姉妹雑誌『驥尾団子』も、琉球処分問題を取り扱った諷刺画を幾度となく掲載している。図7は、日本の指示になかなか応じない琉球に対して、あの手この手の策を弄する日本政府を諷刺している。

画の中央の泣きわめきむずかる小児は琉球、そして琉球王・尚泰である。まわりでいろいろ機嫌を取ろうとする男女は日本政府の琉球施策である。「ジ令」の短冊が気を惹く。右手の鍋は鍋島直彬(1843~1915年)である。初代沖縄県令、そしてのちに県知事である。琉球処分のこの年(1879(明治12)年)に琉球に赴任。37歳の若さであった。彼は、肥前鹿島藩の第11

代そして最後の藩主であった。当時の琉球を星野英夫(1954)は、「瘴属の地、難治の国」(p.105)と評している。「瘴」すなわち熱病と、統治困難な地の意である。手を焼いていることが伺われる。さらに民情を次のように説明している。

当時沖縄は琉球玉の東京移住に対する旧藩士の激昂、公の新県令としての赴任の反抗は秘密結社を設けたり。清国に救援を乞ふものあり、旧藩士は租税を横奪し、頑民は暗夜県官に石を投じて迫害するような状態であった。(p.108)

酷い評言ではある。琉球側の非道を誹謗している。琉球国王・尚泰は、東京赴任を拒絶していた。

## 2.7 和漢の争い(明治13年2月)

琉球帰属問題はなかなか決着しない。年が明けても格好の諷刺対象の画題であった。

図8『和漢の争い』の画家名は不詳である。いがみ合う清国と日本、漁夫の利を狙う英国(ライオン)と露西亜(鳶または鷲)。外題の「和漢」は、いうまでもなく大和と中国のことである。画中に琉球を表象するものは描きこまれていないが、何で争っているのかに思いを致せば、琉球帰属、領有権争いであることは自明であろう。

## 2.8 車の音の図(明治13年12月)

日本は琉球藩を廃し、沖縄県としていたが、帰属問題はまだ決着していない。明治13年当時、清国と露西亜はイリ問題で緊張関係にあった。清国は露西亜との交渉で日本との交渉に手が回らない。このため琉球帰属問題の交渉は停滞していた。交渉の内容は、琉球分割であった。一部は清国へ、一部は独立、一部は日本に併合、という形に決着するはずであったが、結局うやむやのうちに日本の領有するかに至った。

図9の作者は不詳である。車の音を「強魯」と表記している。「魯」は露につながる。露西亜である。どうやら、清国は劣勢のようである。大八車に蹴散らされている。清露の諍いを日本は山頂から高みの見物である。蜻蛉は日本を象徴する。

## 2.9 琉球芋の蒸返しの図(明治14年9月)

明治14年、琉球帰属問題はなお決着しない。三分

割案は雨散霧消した。図10は、琉球帰属問題が燻っていることを諷刺する。芋を洗い、蒸し返すのは清国である。芋洗いの盥には「しなのや」の文字が見える。画面左手手前は日本、煙草を燻らすは西欧列強であろう。作者不詳。

## 2.10 豚芋畑を荒らさんとする図(明治14年9月)

図11は、琉球帰属問題に関わって、清国を非難する諷刺画である。作者不詳。

芋畑から「泡盛」の壺が掘り出されている。芋も泡盛も琉球の象徴である。画面左手の若旦那風なのが日本である。2頭の豚は清国である。清国が日本の領土を荒している、との諷刺である。

## 3 男女の図—宮良安宣

八重山蔵元の絵師宮良安宣(1862-1931)に、後に『八重山蔵元絵師画稿集』としてまとめられるスケッチがある。喜舎場永珣(1977)によれば宮良は毛裔氏第十世である。宮良が蔵元絵師の職にあったのは1891-1897であるので(石垣博孝、1983参照)、「男女の図」が描かれたのは明治中期頃と推測される。画稿集に「男女の図」2枚が収められている。恐らく2枚組であろう。酒飲みの男、たしなめる女(図12)、夫婦であろう。男は飲み続ける。業を煮やした女が長煙管でもって男を打擲する(図13)。滑稽味が充満した作品である。2枚続きとすれば、続きマンガの体裁をとっているともいえよう。本作が純粋な意味での沖縄マンガの始まりであるかもしれない。すなわち、沖縄人による沖縄を題材とした作品であるからである。ただし、本作は素描であり、宮良の生前には一般には流布していない。

## 4 明治期の沖縄の新聞メディア・琉球新報

沖縄で最初の新聞は『琉球新報』である。1893(明治26)年9月の創刊である。大田(1983)は、琉球新報の創刊者は「首里の旧支配階級の青年派に属する20代の若者だった」(p.886)としている。この頃『琉球新報』の他に、寄留商人の利益を代表する『沖縄新聞』(1905年-1914年)、那覇・郡部の利害を代表する『沖縄毎日新聞』(1908年-1919年)が創刊されていた。これら2紙については未調査であるので、マンガ(諷刺画)が掲載されたかどうかについては今

後の課題である。

#### 4.1 丑年を寿ぐ (明治34年 1月)

近代沖縄の最初のマスメディア『琉球新報』に沖縄をテーマとする諷刺画が掲載されたのは明治34年1月1日のことである。落款も署名もないので作者は現在のところ不詳である。(図14参照)

絵の中央に牛を配し、左手には鼻づらにつなぐ綱と鞭を持つ少年、右手に甘蔗を描いている。空白部の多い、いたってシンプルかつ静謐な作品である。諷刺性はあまり感じられない。「牛口勢つき 甘蔗も上作」と賛が描かれている。明治34年の干支は丑である。甘蔗(サトウキビ)で沖縄を表象している、と読める。

#### 4.2 寅年来る (干支の図) (明治35年 1月)

『琉球新報』紙に最初の諷刺主旨をもった画が掲載されたのは、資料的に確認できるものとしては1902(明治35)年1月1日号においてである(図15参照)。この年、1902年の干支は寅である。図にみるように、画の中心には寅(虎)を置き、右下には丑(牛)、画面左上には卯(兎)を置いている。時間は画の右から左方向に流れている。つまり、丑年から寅年へ移るといふ趣旨の作品である。過ぎ去る牛は如何にも貧相ななりで継ぎはぎの粗末な芭蕉布の野良着であり、杖をつき、背にクバ傘を負い、腰には煙草入れと煙管を帯び、画面右手に巻き取られていく。虎は、洋服の一着におよび自転車に跨り、卯年に向かっている。当時、自転車は最先端のハイカラな乗り物である。虎が向かう未来には、銀行、博覧会、官業組合、会社などの経済的富と豊かさが象徴されている。

この頃の『琉球新報』について大田は次のように記している。

明治30年代も半ばごろになると、『琉球新報』同人は、当初の計画どおり寄留商人の手から政治・経済上の支配権力をほぼ奪回するのに成功する」(p.887)

『琉球新報』同人は船会社を作り、銀行頭取に就いたり、議会議長に就いたりしており、この諷刺画は、琉球新報同人の得意な雰囲気をも写している。

「寅年来る」の作者は山口瑞雨である。山口は、栃

木県の生まれ、本名は丸山正美である(結城素明、1953、p.269 参照)。山口については、新城栄徳のインターネットサイトに詳しい(URL①)。新城によると、山口瑞雨は1868年10月21日に生まれる。平福穂庵に師事した。1896年12月に沖縄県師範学校兼中学校に図画教師として赴任した。27歳の青年教師である。1903年から首里区立工業徒弟学校の図画教師も兼任した。1903年、山口は沖縄を離れる。昭和6年6月18日没、享年82歳である。沖縄美術界の牽引役を果たしたようである。

#### 4.3 吹き出しもある (明治35年 7月)

ストーリーマンガの構成素として「吹き出し」は必須であるが、沖縄の新聞で明治35年にはすでに「吹き出し」が使用されている。仁丹の宣伝イラストである。口から吹き出してくる吹き出し線を伴った吹き出しである(図16参照)。作者は不詳である。

## 5 下川凹天の初期作品

下川凹天(1892(明治25)年5月2日-1973(昭和48)年5月26日)は、沖縄県宮古島で生まれた。父親は教育者であり、父親の死後7歳の砌、母親の郷里鹿児島に移転、その後伯父に引き取られ東京に移住。北澤楽天の内弟子となる。下川凹天の事績は大城に詳しい(URL②参照のこと)。代表作に『男やもめの巖さん』『無軌道父娘』『鋼チャンの人生日記』その他がある。漫画の理論書や教則本も著している。また、日本最初のアニメーション制作者としても知られる。

### 5.1 沖縄初期のコミック・ストリップス

下川凹天のコミック・ストリップス(続きマンガ)は、恐らく図17に示す「神出鬼没マゴジものがたり」であろう。大正元年(明治45年)に上映され、日本全国を席卷した「怪盗ジゴマ」からアイデアを拝借したものと考えられる。絵と詞が分離している。6コママンガの形になっているが、いわゆる起承転結型の構成ではなく、長い続きマンガの一部である、と認識される。

### 5.2 下川凹天の初期諷刺マンガ

下川の最初の著作『ポンチ肖像』は大正5年に出版されている。朝日新聞でマンガを担当していた岡本

一平の序を得ての出版であった。タイトルの如く著名人の肖像画が中心である。特筆すべきは、友人知人の漫画家が多数寄稿していることだ。その中で、下川凹天の宮古での幼少時代のエピソードが描かれていたりする。

図18は、『東京毎夕新聞』に掲載の諷刺マンガである。海軍大臣・斎藤実を諷刺する。軍人の軍備増強要求を諷刺している。この年、海軍大演習が行われている。

## 6 女は国寶・・・『沖縄朝日新聞』

『沖縄朝日新聞』は、『琉球新報』の記者がスピアウトして1915（大正4）年に創刊したものである（保坂広志、1983、p.429参照）。時に大正天皇即位の当日である。

「女は国寶」（図19）は、沖縄の新聞メディア初の4コママンガだと思われる（大正15年2月10日掲載）。作者の尾上金城は、県外の作家である。マンガ家は相田杜里夫であるが詳細は不明である。恐らく沖縄県外者であろう。作品は「連続漫画」と明記され、掲載回数が「(31)」となっている。1月の月上旬頃から連載が始まったものと推測される。さらにコマ番号表記が17から20となっているので、4コマの連載4回目であることが推測される。本作品は13日、14日の紙面でも掲載されていることが確認できるがその前後には確認できていない。本紙は欠落部分が多く、詳細は後日の調査に譲りたい。この回の内容は、夫が妻の掌で保護されている様を描いている。つまり、女性が男性を保護するという、女権拡張の含意がある。

## 7 南瓜大尉と大耳兵卒・・・『琉球週報』

『琉球週報』は、米軍の沖縄上陸になった1945年4月29日に創刊号が出されている。発行元は米戦闘宣伝部隊である（大田、2004 参照）。大田はこの宣伝新聞が「沖縄現地で印刷された」（p.226）と述べている。さらに、この新聞の概要を次のように述べている。

『琉球週報』米軍の前線部隊が沖縄で発行したものだ。すべて手書き。米軍が沖縄に上陸したことを伝える第1号から、ドイツ降伏を伝える号外を含めて、5号（5月20日発行）まで出された（p.227）。

日本終戦まで後3カ月である。『琉球週報』は米軍による情報宣伝作戦としての媒体であり、本文は漢字にルビがふられ漢字力に問題のある住民にも読めるように配慮されている。マンガも掲載され、ソフトな内容になっている。マンガのタイトルは「南瓜大尉と大耳兵卒」、作者は不詳である。日系二世のスタッフが関係しているらしいことが推測できる。このマンガは『琉球週報』だけでなく宣伝心理戦を仕掛ける『布哇週報』、『まこと』にも掲載されている（沖縄県公文書館、(編)）。図20は、ドイツの総統ヒトラーを話題にしている。ドイツ語の「ハイル」と日本語「入る」の発音の類似性を用いた地口で揶揄を狙っている。敵国の首脳であるヒトラーを嗤いものにし権威を失墜させる意図は明らかである。第2号（5月6日にはヒトラー死亡の記事が掲載されている。全5号のうちマンガ「南瓜大尉と大耳兵卒」は4回掲載されている。マンガの内容自体は他愛ない軍隊生活の笑いを誘うものである。そうだろうか。宣伝の意図があるはずである。このマンガが沖縄マンガであるかどうかは疑問のあるところである。しかし沖縄人（日本人）を対象として描かれていることは確かである。戦時中の敵対宣伝媒体である新聞にマンガを掲載するといった米国の戦略は驚異的である。

## おわりに

本稿は、沖縄のマンガについて黎明期の状況について検討したものである。最初期の沖縄マンガ制作者を浮世絵師・葛飾北斎と考えた。描かれた沖縄と呼ぶにふさわしい。明治初期には、いわゆる「琉球処分」を題材とした諷刺画が描かれた。画家達は沖縄人ではない。

明治中期ごろの八重山蔵元絵師の宮良安宣の、「男女の図」が狭い意味での沖縄マンガの祖と言えるかもしれない。ただし、本作は素描であり、複製頒布されたものではない。

明治26年に、沖縄初の新聞『琉球新報』が創刊され、同紙にマンガらしきものが掲載されたのが明治34年である。さらに、諷刺的色彩の強いマンガが現れるのは明治35年である。この場合も制作者の山口瑞雨は県内居住者ではあるが、県外者である。

明治45年あるいは大正元年に、沖縄県の宮古島生まれの下川凹天が作品を『東京パック（第2次）』や



『東京毎夕新聞』に掲載し始める。ただし、彼の両親とも沖縄県外者であり、彼は沖縄をテーマとした作品も発表していない。下川凹天を沖縄のマンガ家とは呼ぶには躊躇いがある。

大正期の終期に4コママンガが沖縄の新聞メディアに掲載されるが、作者、画家とも沖縄県外者であろう。

こうして、幕末から明治、大正期を通じて沖縄のマンガ状況は黎明期の段階であった、といえよう。

## 参考・引用文献

- 保坂広志 1983 「沖縄朝日新聞」 沖縄大百科事典刊行事務局 (編)『沖縄大百科事典』上 沖縄タイムス社 p.429.
- 保坂広志 1983 「沖縄毎日新聞」 沖縄大百科事典刊行事務局 (編)『沖縄大百科事典』上 沖縄タイムス社 p.585.
- 石垣博孝 1983 「宮良安宣」 沖縄大百科事典刊行事務局 (編)『沖縄大百科事典』下 沖縄タイムス社 p.608.
- 喜舎場永珣 1977 『八重山民俗誌』下 沖縄タイムス社
- 栗原達男 2009 「北斎の沖縄」『翼の王国』通巻485号 pp.40-63.
- 星野英夫 (編著) 1954 『鍋島直彬公傳』 鍋島直彬公四十年祭記念会
- 牧港篤三 1983 「琉球新報」 沖縄大百科事典刊行事務局 (編)『沖縄大百科事典』上 沖縄タイムス社 p.538.
- 宮良安宣 (石垣市立八重山博物館 (編)) 1993『開館二十周年記念 八重山蔵元絵師画稿集』 石垣市立八重山博物館 沖縄公文書館 (編) 不明 『太平洋戦争における米国作成宣伝ビラ』1 沖縄公文書館
- 大城亘武 2000 「沖縄コミック史」 天空企画 (編)『沖縄ポップカルチャー』東京書籍 pp.182-192.
- 大城亘武 2010a 「沖縄マンガの展開」 島袋直子 (編)『沖縄マンガ展』(図録) 文化の杜共同企業体 pp.40-41.
- 大城亘武 2010b 「沖縄マンガの系譜」上、中、下 『沖縄タイムス』7月21日、22日、23日。

- 大田昌秀 2004 『沖縄戦下の米日心理作戦』岩波書店
- 大田昌秀 1983 「琉球新報」 沖縄大百科事典刊行事務局 (編)『沖縄大百科事典』下 沖縄タイムス社 pp.886-887.
- 周 煌 (原田禹雄 訳注) 2003『琉球国志略』 榕樹書林 浦添市美術館 (編) 2010 「北斎の描いた琉球 琉球八景」 浦添市美術館友の会
- 山崎英祐 1981 『團圓珍聞』1 (復刻版) 平文社
- 結城素明 1953 『藝文家墓所誌』 學風書院

## URL

- ①新城栄徳<http://ryubun21.net/index.php?itemid=542&catid=2>
- ②大城亘武<http://www.ocjc.ac.jp/faculty/yositake/yositake/hekoten.html>

## 附記

- 1 葛飾北斎・作「中島蕉園」(『琉球八景』の内)は、浦添市美術館のご厚意で、掲載することが出来ました。記して感謝申し上げます。
- 2 明治初期の諷刺画については、東京大学法学部附属明治新聞雑誌文庫(現 近代日本法政史料センター [明治新聞雑誌文庫])の資料を使用しました。記して感謝申し上げます。
- 3 「男女の図」(『八重山蔵元絵師画稿集』より)は、石垣市立八重山博物館のご厚意により転載する事ができました。記して感謝申し上げます。
- 4 本研究の実施に当たり、新城栄徳氏より山口瑞雨および「女は国寶」についてご教示をいただきました。記して感謝申し上げます。
- 5 『琉球朝日新聞』の複写資料では不鮮明であったマンガ家名が、沖縄県立図書館の斡旋と、原紙を所蔵している名護市立博物館の厚意で明確にすることができました。記して感謝申し上げます。
- 6 『琉球新報』のマイクロフィルム資料は、沖縄県立図書館蔵、複写版資料は、浦添市立図書館蔵を使用しました。記して感謝申し上げます。
- 7 『東京毎夕新聞』資料は、国立国会図書館蔵のマイクロフィルムからの複写である。記して感謝申し上げます。

# Toward an Okinawa Manga History: The Dawn of Okinawa Manga

Yoshitake Oshiro

## Abstract

This review covers Okinawa Manga from 1832 to 1945. This review traces the origin of Okinawa Manga in Katsushika Hokusai's "Ryukyu Hakkei (Eight views of the Ryukyu Islands)."

Also reviewed are satirical drawings of Ryukyu concerning the question of where Ryukyu fits in relation to China and Japan during the early years of Meiji Era. Moreover, satirical drawings published in 1901 and 1902 are examined from the Ryukyu Shinpo, the first commercial newspaper in Okinawa.

Also, included are reviews of the works of Hekoten Shimokawa, a native of Ryukyu (known today as Okinawa), who became famous as a manga artist in Tokyo. Discovered was a series of 4-frame manga published in 1912 in the Ryukyu Asahi Shimbun.

Lastly, discussed is anti-Japanese propaganda featured as manga advertisements in the Ryukyu Shuho during wartime.